

## 遺稿

### わたくしの履歴書

手嶋 正毅

私は一九一三年に、横浜の吉浜町という貧民街で「かんかん虫」の子供として生れたのであるから、余り自慢出来る氏素性ではない。「かんかん虫」といっても、恐らく今の学生には何のことかわかるまい。吉川英治の初期のものに、「かんかん虫は唄う」という作品のあることも、おそらく、学生諸君は知るまい。

私は今でも、これが彼の作品の中で最も良い出来栄えだと思っている。吉川英治は家がまずしいので、少年時代、私の父と同じ頃に横浜ドックで船腹に付いたカキ落しをやっていた。ワイヤーロープで船腹にぶら下げられて、手に握りしめたハンマーでカキを叩き落すその音がドックにこだまして、カーン、カーンと聞える。その頃の横浜では、この日雇人夫を蔑んで「かんかん虫」と呼んでいた。浜ッ子の柄の悪さと意気の良さは、私にはこの「かんかん虫」に由来しているよ

うな気がしてならない。

或る時、英治少年は足を泣らせてドックのコンクリートの上に落ちて重傷を負ったことを、作品の中に書いている。私の父も同じ目にあつて、その時、ふところに入れていた成田の不動さんのお守札が真二つに割れて九死に一生を得た、と私に語っていた。

そのせいか、吉川英治の「かんかん虫は唄う」を読むと、今でも不思議と幼年時代への郷愁をそえられるのである。

それから五〇年の半生を歩んできたのだが、振りかえってみると、まったく下らぬ人生の記録でしかないことが、今となってはよく判りかけたところだ。辛かったことも随分あったような気がするが、年月の流れに洗われて、愉しい思い出だけが残っていない。

私の生きてきた半生記は日本帝国主義の半生記でもある。私は青年時代から終戦までに日本帝国主義に三たび、戦後は二度、嫌という程、酷い目にあわされてきた。だから、学識や経験は人様に自慢出来ないが、「慷慨の志猶存せり」という気概だけは人後に落ちないつもりだ。「帝国主義」の正体は、レーニンの本を読まなくても身体でうけとめて来たつも

りである。

高村光太郎は「鯨」という木彫で、それを表現した。彼はまた、その真摯な眼光と貪欲な巨口を詩に託して歌っている。「日本帝国主義」という見慣れぬ文字まで使って……。しかし、奇妙なことに、草野心平やそのほかの詩人達が編集した藍集には、この政治詩が注意深く省かれているのは、どうしたことだろう。

高村光太郎に触れたついでに、彼の詩の拔萃を諸君に紹介しておこう。

日本の形は変わりましたが

あの苦しみを持たない

われわれの変革を

あなたに報告するのは

つらいことです。

この詩は、近頃、有名になった光太郎の「智恵子抄」からの拔萃だが、実は私がいつか、本を上梓する機会があったら、その扉に引用したいと思ってメモしておいたとおきの詩。勿論、私には作詩するような才能も意欲も持ち合わせていない。ただ、格調の高い詩が好きなのだ。それにしても、こ

遺稿（わたくしの履歴書）

の詩には戦後日本のもやもやが詩人の直感で見事に捉えられていないだろうか。

詩人を思い出したついでに、もう一つ作家の思い出に触れておこう。あれは昭和三十八年の晩秋の頃だった。広津和郎さんと夕食を共にしながら、三時間も雑談を交したことがある。彼は青年時代は白哲の美青年だったそうだが、今ではもうその面影はない。だが、話しをしていて、非常に柔軟な考え方、拔群の記憶力、巧まざる話術、そして何よりも彼の当代一流のヒューマニストとしてのお人柄に、私はすっかり魅了されてしまった。

私は彼の作品は、随筆や文学的伝記類数冊しか読んでいない。その中でも「年月のあしおと」が一番好きだ。その続編は昨夏、病院のベットの上で、学生が買って来てくれたものを読んだが、それよりも前編の方が素晴らしい。何という格調の高い、洗練されたリアリズムの手法だろう。日頃友達にも学生にも、一読を薦めているのだが、その作家と今、目の前でこうして語り合っているのである。話題は自然と、志賀直哉、芥川竜之介、宇野浩二、はては諸君の純情な先輩、水上勉など、作家達の話が沢山出て来たのだが、それについては、

紙数の都合でまたの機会に譲ることにしよう。

兎に角、ここ数年來、彼は松川事件の弁護やそれについての執筆に専念してきたことは、人の知る通りである。それ等の記録類は雑誌や単行本で学生諸君も知っていることと思うが、彼はその稿料や印税を全部、松川事件の関係団体に寄附してしまつた。そのために作家としての収入は、昔書いた本の僅かな印税しか入らない。それでは、とても暮しの足しにならない。そこで、彼が好きで蒐めてきた骨董品を手放して生計をつないで来たのだそうだ。

エミール・ゾラはドレフュース事件でドレフュース大尉の冤罪をそそぐ為にその晩年を捧げて遂に無罪の判決を見ないうちに、その不幸な生涯を閉じたが、松川事件でも最高裁でどうなるか、最終判決が出てみなければ、海の物とも山の物とも判つたものでは無かつた。それでも、広津和郎は辛抱強く弁護に努めた。そこには執念に近いものが感ぜられた。

これは全く、氏自身にとって些細な私事に亘る事かも知れないが、こと松川事件について書いた労作の収入には一切手をつけなかつたという、彼のけじめのある生活態度に、それが強制されたもので無いだけに、私はその時、全く頭の下る

思いがした。彼は本当に誇りとするに足るヒューマニスティックなインテリゲンチヤであると思つた。

さて私は晩学の徒であるから、学生諸君に学問上の教訓など語る柄ではない。唯、私が昭和十一年、北京留学時代に会つたひとりの学者から受けた印象を諸君にお伝えしておこう。当時、北京東城、東觀音寺胡同に中江丑吉という老学者が曹汝林の朱塗の邸を借りて独り住いをしていた。割と広い内庭（院子）には、大きな枝を張つた槐樹がその陰を落していた。

私は週に一、二度は中江さんの家に遊びに行つた。行く前には電話で都合を聞いた。今だに中江さんの電話番号を覚えているところを見ると、余程、頻繁に電話を掛けていたのだろう。一五八東局ノ、偶に私が電話をしないと、今度は中江さんから誘いの電話が掛つて来た。中海公園にもよくお伴をした。何日だったか、今日は勉強して行けないと断りをいって、四畳半の部屋で昼寝をしていたら、いきなり窓辺で大きな声をした様に思つて眼を覚したら、中江さんが独得の悍高い声で「オー、お前が珍らしく勉強しているというので、見に来たら、何だ昼寝をしているではないか」と叱られた事がある。

丑吉さん(当時五十五才)は中江兆民の長男である。いつも私達に「わしはとても親爺のスケールの大きいには叶わん」と述懐していた。しかし、彼はその学究としての資質と格調の高さでは優にその父、兆民を凌いでいた、と私は今でもそう信じている。丑吉さんは、其の頃、馬代の封建制を専門に研究していた。マルクスの本も原典で実に良く読んでいた。専門の理論と資料とを徹底的に研究するという態度を、当時二十三才だった私の若い頭に印象づけてくれたのも、中江さんだった。勿論、だからといって、私がそれ以来、真摯な学者になったという訳ではないけれども、兎に角、強烈な印象を私の脳裡に刻みつけたことだけは確かである。また、彼は交友関係の中でも、「上等な人間」と「下等な人間」とを見分ける、何かしら直観力のようなものをもっていた。彼は学識の多寡で人間の等級をつけるような狭い了簡を持っていなかった。人間として立派であるかどうか、その人が誠実であるかどうか、事に臨んで左顧右眈したりしないかどうか、を評価の基準にしていたようである。

中江さんは、東大政治学出身の学者で、マルクス主義の造詣が深かったが、私は今でも、中江さんは本質的にはアリス

遺稿(わたくしの履歴書)

トクラートであったと信じている。しかし、実に誠実で、飄逸な、それでいて時代の推移を見抜くのに炯眼な老学者だった。明治時代人の魅力を身に付けていた。

だから佐野学が獄中で転向声明をしたとの噂を知ったとき、彼がいかに堪えられないといった風の侮蔑の表情を面にあらわしたのは、何となく判るような気がする。佐野学がモスクワに特殊任務を帯びて潜行する時、北京で中江邸に泊った。その時の話を中江さんは私に面白おかしく語ってくれた。

「あなたは、マルクス主義を信奉しているそうだが、マルクスの本を全部、渉猟しましたか」。佐野はそれに答えて「否、全部は読んでいないが、マルクス主義は真理であると思う」と。片山潜もモスクワへの途上、中江邸に泊った。私が中江邸の奥の間の食堂で昼食をよばれている時、こんな話をしてくれた。「片山潜はアメリカで皿洗いをしながら苦学していた故か、朝早く起きると、フトンをきちんとたたんで、正座して、お早う御座います。と両手を突いて、お辞儀をするんだよ。全く実直そのもののような男だった。だから私は彼にこう言っちゃったよ。他所の家に泊ったらフトンなんかたたむものではないとね。そうしたら、彼は大真面目で、ハ。そ

一八九(六〇五)

うですか、といった。」と、中江さんは大笑いして話していた。片山潜には好感を抱いていた様子だった。

中江さんの家には、あの『孫文伝』を書いた鈴江言一さんが、よく遊びに来ていた。中江さんは彼の事を王子言（この名は言一を逆さにした中国名）王ノ、王ノ、というて彼と竹馬の友のように付合っていた。鈴江さんは、また中江さんを師と仰いで尊敬していたようだ。



前稿ではたしか『孫文伝』の著者鈴江言一さんの名前がでたところで筆をおいたと記憶している。それは昭和十二年夏のことであった。日華事変のはじまる直前である。

東観音寺胡同（胡同は小路というほどの意）の中江邸から、中江さんといっしょに散歩に出た途上、両耳がびんと突った、筋肉の引緊った、見るからに精悍な黒犬が、二本の前脚をきちんと立てて坐ったまま、軒先から私達をじっと見守っていた。すると中江さんが私を振返って、「おい、あれを見ろよ。王（ワン）そっくりじゃないか」と云って、くすくす笑い出した。

そう云われてみると、鈴江さんの風貌は、この黒犬から受

ける感じとそっくりだった。色の浅黒い、彫の深い顔、眉間に二本の太い縦皺が走り、黒目がちの大きな瞳がじつと据ったまま動かないでいる。瘦せた両頬にも縦皺が何本か刻まれていた。笑うと相恰が崩れて、たちまち童顔にかわったが、鈴江さんの風格には多年の風雨に削られて突兀とした落木を思わせる、何か近より難いものがあつた。

鈴江さんにも私は時偶、御馳走になった。彼は青年時代、家が貧しくて一時東京丸の内の駅前で、人力車夫をしながら、明治大学専門部の夜間に通っていた。だから、車夫の走法については一家言をもっていた。一緒に街を歩いていると、私達の向うから走って来る洋車（人力車）夫の足脚の運び方について、あれは蹴込みが深くて良いとか、なんとか評していたのを覚えてる。

当時鈴江さんが四十四・五、私はまだ二十三才だった。或る日のこと、私が昼飯を誘うと、それでは中国人の労働者がよくゆく飯屋に案内しようと言うことで、あの北京飯店（ホテル）のある東單牌樓（はい楼というのは、封建時代、孝子節婦の名を張り出して、その善行を顕彰した大きな樓門で、大通りの角々に建てられている）の羊毛胡同の角にある、小さな菜館（めし屋）

に連れてゆかれた。入口から奥の方に入る通路にそって炊事場がある。土造りのカマドがいくつも竝んでいて、底の尖り気味の「支那鍋」に油や豚肉や野菜を放り込んで、長柄の鉄製しゃもじでジューンと良い音を立てて、炒めものをつくっている。お客が勘定を済ませて出てゆくとき、何人ものボーイやコックさんが鉄のしゃもじで鍋をチャンチャラ叩きながら口伝えにチップ（酒錢）の高を威勢のいい声で、一毛錢（十分の二円）と呼び上げる。酒錢が少ないと、かえってこちらが気のひけることがある。

鈴江さんは紅対蝦（大エビをぶつ切りにして、トマト・ケチャップで煮たもの）が大好きだった。その日も紅対蝦のほか二品の菜と炸菜湯（スープ）をとった。あとで勘定をしたら、余り安いのでびっくりしたほどである。鈴江さんは飯を食いながら武漢革命のときのエピソードを話してくれた。

「私はあの時北京人民代表のひとりに選ばれた。中国共産党北京市委員会の指導する集会には、沢山の北京市民が集まった。

私も、代表の一人として、中国語でアチ演説を一席やった。万雷の拍手に送られて、武漢へと旅だった。

遺稿（わたくしの履歴書）

私達代表を乗せた汽車が漢口についてのは夜であった。提灯ををもって出迎えてくれた武漢革命政府代表や漢口市民に迎えられて、大デモンストレーションの渦巻の中にまきこまれた。街中が革命の喜びで沸き返っていた。大通りを埋めつくした提灯の波うつ中で、熱気を孕んだ市民や労働者の身体と身体とが揉み合って、胸がふくらみ、気が遠くなるほどだった。私は一生のうちで、こんなに嬉しかったことはない。

実は蒋介石の反革命クーデターが起ったのは、それから数日後のことだった。私は命からがら、着のみ着のままで漢口を脱出して、長沙に潜行した。そこで、長沙の渼堂（風呂屋）に住み込みの三助となって、一月ほどかくれていた。それから揚子江の川蒸汽に偽名をつかって乗せてもらって、上海にようやくのことで辿り着いた。

鈴江さんは北京を出発する直前に、恐らく伊藤武雄氏（満鉄）の推せんで囑託の採用通知をもらったばかりであった。ちょうどそれから一ヶ月ほどして上海に辿り着いたのだが、その足で満鉄上海事務所を訪れたら、彼を待っていたのは、囑託解除の辞令だった。

鈴江さんは、そう語った後、就職から退職までこんなに短

かかった者は恐らく前例がなかったに相違ない、と呵々大笑していた。武漢革命時代の彼の活躍については、その時、もっと詳しく順序立って聞いた筈なのに、私の記憶に残っているのは、こんな逸話の断片でしかない。それにしても、鈴江さんの生涯に残された唯一の名著として、今日もなお高く評価されている『孫文伝』は、彼のこうした実践と切り離しがたく結びついて、はじめてまとめられたものだと思う。

彼の老斗士としての風貌は、たしか先年、上梓された中江さんの思い出を書いた本の扉に収められている鈴江さんの写真に見ることが出来る。この本の編集に当たったのは、私の大学時代のクラスメートの加藤惟考（東京教育大）である。その写真には、デスクに向って新聞をひらいて読み耽っている鈴江さんが大写真になっている。その新聞は、確かインプレコール（コミンテルン機関誌）であったかと思う。

後にインプレコールにかわって、ストックホルムで発行されるようになったデイ・ヴェルトは、昭和十三年、香港経由で私から鈴江さんに送っていたので、間違いないと思う。北京で鈴江さんにその写真を見せてもらった時、それが先に書いた彼の風格そっくりなので、私に一枚下さいと所望したが、

彼はただ笑って答えなかった。なんとなく身辺を警戒する習慣が、身につけていて離れなかったのかも知れない。

さて、私の北京留学の半年が過ぎようとしていた昭和十二年六月頃のことであった。或る日、中江さんが夏休みに鹿兒島の指宿温泉と一緒にゆかないかと誘った。それから間もなく、あの芦溝橋事件がおこったので指宿行は中江さん独りですることになった。私が留守番の役を仰せつかったとき、中江さんから、紐で結えた五、六冊の黒表紙の手帳を預った。

北京の街は、歴代の王調での戦争のつど、戦火から免れてきたから、今度もおそらく大丈夫だと思いが万一の場合を考慮して、預って欲しいとのことだった。この手帳にはこれまで周代封建制（前稿でこれを「馬代」と誤植されたのは、私もいささか辟易したが）を中心とする研究メモがギッシリ書き込まれているとのことだった。やがて日華事変が拡大し、北京の家族だけ大連に引揚げる際、この手帳を鈴江さんにバトン・タッチした。鈴江さんは当時なお独身で身軽だったからだ。

中江さんは、それまでに雑誌に発表したり自費出版した著作のうち、どうにも意に満たないで改訂を必要とした分は、配布先の友人から漏れなく回収したそうである。人一倍良心

的で、俗に云う凝り性だった。玉突に熱中すると玉台を家に買入れるほどの凝り方であった。と中江さん自ら私に語っていた。しかし、晩年は研究のさまたげになるものは一切遠ざけていたようである。そればかりでなく、人との交渉も、かなり意識的に抑制していた。周囲の人々と語り合うこと無しに一日も過せない中江さんではあったが、また話している中に、仕事にかかりたくなると、またそれが彼の癩に障るといった風で、いつか私に「生来、物事にけじめのつけにくい質なので困ったものだ。」とこぼしていた。

私は北京では、東單牌樓よりずっと北にある東四牌樓に住んでいた。毎日、ふたりの中国人の年寄りの家庭教師が安い月謝で中国語を教えに来てくれた。語学の大切なことは今でもそう思っているが『急就篇』（即席入門書）のイロハから学ぶのは、どうにも無味乾燥で身が入らなかった。ふたりの教師は、怠け者の私になんとかして中国語に興味を持たせようと、随分、骨を折っていたようだ。

関先生の方は私にその一法として、唐詩の誦い方を教えてくれた。私は、唐代に、詩が安楽な（歌謡曲）として一般庶民の間にひろく愛誦されていたこと、韻律がまさに詩吟のため

#### 遺稿（わたくしの履歴書）

にあること、そしてそのうたい方が千年後の今日まで伝承されていること、をそのとき始めて知って驚いた。私が教わったのは、あの有名な王維の「元二の西安に使用するを送る」詩である。

渭城朝雨浥輕塵

客舍青青柳色新

勸君更盡一杯酒

西出陽關無故人

私には楽譜が作れないから、ここで歌い方をお知らせできないのが残念だけれども、とにかく日本での詩吟のような、壮士風、劍舞に合せた雄壯活潑なものではなく、短い抑揚の単調な繰返しであった。唐三彩に残されている、あの素朴な感じの人々が口誦さんだかと思われるような、いかにも古風な歌謡である。

唐代の詩人の中で、歌謡曲として世間で最も人気があったのは、七言絶句に恋とエロチズムを盛込んだ王昌令であるが、私はどちらかというところ、七言律詩なら白楽天、あるいは、やさしい言葉で歌い上げた李白の五言絶句の方が好きだ。ついでながら、李白の「友人を送る」詩の一部を紹介しておく



う。

此地 一たび別れを為し

孤蓬 万里征く

浮雲 遊子の意

落日 故人の情

手を揮って茲より去れば

蕭蕭として班馬鳴く

どうも邦訳にすると、なるほど意味はとれるが、詩形が崩れ、五言律の美しさが失われてしまう。藤村の「千曲川旅情の歌」の一節も、この詩にヒントを得たのかもしれない。どうやら、北京での私の語学は、あらゆる方向に横こりして、勉強の足しにはならなかったようである。

さて、北京留学は論文審査できめられた。拙論の題は、「中国铁路発達の不均衡性」であった。私が就職先に満鉄を選んだのは、満鉄が当時、世界最大の株式会社であったからではない。学生運動が崇つて、内地で就職の見込みが立たなかったからである。満鉄本社から採用通知をうけたのは入社の前年十一月であった。入社までの四ヶ月間に、私は満州に渡ってから何をしようかと考えていた。その時、ふっと私の

頭に浮んだのは、レーニンの『帝国主義論』序文だった。

そこには、帝国主義が発展するという法則は、半植民地中国の鉄道網のそれにあらわれているということが書いてあった。私はこれだと思った。なぜなら、私自身これからその真唯中に飛び込んで生活するのであるから。こうして、研究の長期プランが出来上った。私が二十二才のときだった。今から三十四年前のことである。

当時、大連の満鉄本社には、大上末広氏の主宰する満鉄経済調査会という調査研究機関があり、『満州経済年報』を発行し、そのほかにも沢山の調査研究報告をだしていた。のちに、この機関は千名の人員を擁する、調査部というほう大な組織にふくらんでいった。そして、それとともに、ますます国策的性質をおびるようになった。この機関には、大上氏をはじめとして、何人かの青年幹部がいて、なんとなく全体の指導にあたっていた。口にマルクス主義をとなえて、大和ホテルのグリルに時々集っては談論風発、中々派手にふるまっていたから、一部の人々からは「満鉄青年将校」とよばれていた。いちど、私も大上氏の家によばれて、調査会の方に来るように勧められたが、鉄道研究を専攻していたのと、なに

かこの会の空気になじめなかったのでお断りした。

私は主に鉄道部と連絡をとって、資料の蒐集にあたる。同時に、自分の足で当時の満州・中国本土を調査した。私は今でも列車に乗っていて、路盤のダンピングの調子はどうか、この機関車は貨物用か旅客用か、その索引力はどの位か、いま時速何料で走っているか等々、鉄道について、いろいろのことを知っている。

私が北京留学のために提出した論文が、最初にまとめたものだった。今からみればまことに拙いものだが、それでも青年期の情熱を燃やして一生懸命にまとめた、懐しい処女作である。その中では、清代いろいろの列国の中国鉄道への資本・商品輸出の歴史、各鉄路間、およびそれと土着交通機関との不均等な配置、半植民地的運賃政策の特質、などがふくまれていた。北京留学を志したのは、清朝いろいろの鉄道史料の蒐集にあった。その後の数年間に、個人としては、日本人で私が一番多く貴重な資料を蒐集していたかもしれない。戦後、平野義太郎先生に久し振りでお会いしたとき、私の顔をみるなり――

「あの頃の資料と君がまとめた論稿は持帰ることが出来ま

遺稿（わたくしの履歴書）

したか。」と聞かれたのを覚えてい。すべて、没収されてしまった。しかも日本側官憲に。

二回目の論稿で、はじめて陽の目を見たのは、天野元之助先生（元大阪市大）芝池靖夫（現大阪外大）等とまとめた『中支の民船業』（博文館、昭和十八年刊）である。この本で私は『イニン』ロシアにおける資本主義の発展』の方法論を使った。この本には一ヶ月にわたる蘇州での嬉しい思い出があるが、もうそれにふれる余裕がない。蘇州の街頭風景、寒山寺の勤行、「詩迷」のことなど書けばきりがない。この本は、当時、文部省の「良書推薦」に指定された。それとともに皮肉なことに私が反戦思想の廉で内地へ強制送還を受ける証拠の一つとなった。

戦後、内地へ引揚げてきたS氏の話では、この本が、南下した中国紅軍が、揚子江を敵前渡河して蒋介石国民党軍を中国大陸から追い出したときの作戦資料に使われたそうである。毛沢東のあの有名な「紅軍雄師渡長江」にはじまる七言律詩の……。これが私にとって、非劇的結末におわった八年にわたる大陸生活のせめてもの慰めである。ここまで書いてきて、もう紙数が尽きてしまった。これは、日本帝国主義と共に生

れ、日本帝国主義と共に生きてきた一貧書生の、これが下らぬ人生の断簡である。

〔立命館大学経済学会会報（昭和四三年）より転載〕

## 経済学と私の人生

手嶋 正毅

私が高校生活をおくった昭和四年から七年までのあいだに、あの満州事変がおこり、日本資本主義がいよいよ臨戦体制にむかう前夜にさしかかっていた。秋の記念祭のころになると、学生の自治、軍国主義反対（軍事教練反対）!! のスローガンをかかげた学生ストライキが全国的に連鎖反応をおこし、毎年のように、それがくりかえされていた。

私の入学した文科乙類（ドイツ語系）は四〇名の定員であったが、在学中、二回の全学ストライキをやって処分者が続出し、卒業時の三年生のときには、わずか二五名に減っていた。高校内には自治学生会ができ、少数の学生からなるRS（読書会）が非合法にひらかれていた。わたくしが社会科学の

本をはじめて読んだのは、このRSでであった。RSの指導者は私たちに『マルクス主義労働者教程』やブハーリン『史的唯物論』などをすいせんしてくれた。ブハーリンの本の表紙には真紅の縁取りをして真中に、頭髮のすこし薄くなった豊頼の五〇年輩のブハーリンの写真版がついていた。検閲のきびしい当時のこととて、伏字の多い本であったが、その伏字を前後の文脈から埋めてゆくことも、なにか秘密の宝庫の扉でもひらくような気がして、いまから思い出しても愉しみの一つであった。

ブハーリンは、のちスターリン時代に肅清され、非劇的生涯をおわった学者、政治家のひとりであり、そして学問的には誤りの多い学者ではあったが、つねに最新の課題にとりくみ、当時の学会でバイオニア的役割をはたしてきた彼の努力にたいしては、レーニンも一定の評価を下していたようである。

実はわたくしはこの『史的唯物論』に接して、はじめて経済的土台の位置と役割とを知り、京大経済学部をえらんで経済学を専攻する意欲をもつようになった。経済学とともに哲学と歴史に興味を抱くようになったのも、あの燃えるような真紅の扉の本であったような気がする。

いまでも、わたくしは不十分ながら経済学とならんで哲学の研究を尊重してきたことは良いことだったと思う。哲学なくしては経済学なしといってもいいのではないだろうか。しかし、哲学の分野での研究の進み方はともすれば経済学のそれよりおくれ勝である。

わたくしが、最近、読んだ哲学書のなかではアルフレッド・コージング監修の『マルクス主義哲学』（一九六九年一〇月刊、大月書店より上巻発行）が高い理論水準をしめしている。とくにⅢのヴィタリ・ストリヤロフの研究は経済学の研究に直接役立つし、Ⅶのヴォルフガング・アイヒホルン一世とギョントナー・クレーバーの研究は哲学の分野から国家独占資本主義にアプローチしている卓抜な論攻である。総じて、東ドイツにおけるマルクス主義哲学の発展には、眼をみはるものがある。

この国ではもはや哲学研究が味気ない解釈学の域を乗りこえて、最新の社会主義、国家独占資本主義の研究に有力な方法を提供しているのを知って、多に啓発され、はげまされた。

「経済学の分野では宇高基輔訳『資本論と現代資本主義の諸

問題』（一九六九年九月刊、協同産業KK）を興味をもって読んだ。なかでは、ヴェ・ペ・シクレドフの私的所有の資本主義的止揚過程の系統的研究には多くの示唆にとむ展開が試みられている。

こうした、最新の研究水準に接して、いまの学生には私たちの頃より、はるかに良い研究の便宜のあたえられているのが羨しく思われる。

それについても年月の足音は早いものだ。私の学生時代からはやくも四〇年がたった。いま頃になって、ようやく学問への取組みの弱さをつくづく感じている。生来、薄志弱行の徒である私には、あとに残された生涯に研究上のおくれを、どれだけとりもどせるかと、自らに設問している。そのかみの曹覇將軍にあやかりたいものだ。

丹青不知老将至

富貴於我如浮雲

杜甫

〔立命館大学経済学会報（昭和四五年）より転載〕

## 研究業績の要約

（和和三七年・九） 手嶋 正毅

### 《論文》

#### I マニユファクチュア研究

1、わたくしたちの知るかぎりでは従来、初期産業資本の法則性の基礎的展開は日本の経済学、経済史学界ではあまり行われていなかった。そこで私は論文の「日本のマニユ研究における基本的諸問題」と「封建社会解体期の産業資本とマニユ賃労働の範囲」で、問屋制家内工業、単純協業、およびマニユファクチュアからなる初期産業資本の諸形態を経済法則の部面から解明した。

とくに、そのなかで問屋制家内工業（分散マニユファクチュア）の法則的研究は私の記憶に誤りがなければ日本で最初の試みである。

そのうち、後者の研究では初期産業資本の生産関係の一端をなす賃労働が徒弟制の残滓をもちながら賃労働に

転化する形態を経済法則の変則化（Anomal）として規定した。この研究は昭和三七年春国際歴史学界日本委員会からバリ・リストにすいせんされ登録された。

2、論文の「備後地方における綿織物マニユファクチュアの歴史」は初期産業資本の法則性の具体化であり、拙論の理論的命題をそのなかで実証的に展開したものである。この研究では備後の最新の「社会経済構成」の研究から始めて歴史的研究の逆推の方法を応用して、産業資本の運動法則を実証した。以上の研究は独占資本の歴史的発生過程の研究の基礎をなすものである。

#### II 産業研究

「日本鋼造船業における下請制の研究」「備後織物工業の地域的社會經濟構成」の論文は、独占資本とそのものに従属する非独占体（自由資本と小商品生産者）とのそれぞれの生産様式をあきらかにし、その相互関係より経済法則の変則化を解明したものである。

従来日本の学界では自由資本、小商品生産者の生産関係を量的標識で区別しようとし、また従属から発生する経済法則の変則化が、かならずしも明らかでなかった。そこで

第一に、生産関係の質的標識をあらたに設定して階層区分をおこなった。とくに自由資本と小商品生産者の確定は最初の試みである。小商品生産者の賃労働者化、自由資本の独占資本への外業部化は学界ですでに解明されているが、この問題を経済法則の変則化として提唱したのは拙論が最初の試みである。

以上の研究は独占資本主義の社会経済構成体を形成する経済セクター（独占資本、自由資本、小商品生産、自然経済）を確定する理論的研究の一部をなす。

### III 賃金論研究

従来、賃金理論の研究は賃金法則の一般抽象理論（労働力の価値法則一般）の段階にとどまっていた。「賃金法則と同一労働同一賃金」「等級制賃金の理論」の論文では一般理論にもとずいてさらに、労働力の市場価値、労働力の個別市場価値の理論を展開し、労働力の価値構成の具体化と実測（日本、西独、アメリカ）の方法論、賃金法則と貧困化法則（とくに絶対的貧困化法則）との相互関係をあきらかにした。

### IV 国家独占資本主義研究

遺稿（研究業績の要約）

最近数年来、国家独占資本主義の研究は国際的にあたらしく脚光をあびてきたが、理論的にも実証的にもまだ、研究の途上にあり集大成されていない。

研究テーマは①独占資本主義より国家独占資本主義への移行のモチーフとしての資本の内的矛盾の運動法則の解明②移行のモメントとしての全般的危機と国家独占資本主義との相互関係 ③国家独占資本主義の機構を形成する生産関係（国有化）、管理制度、統制の統一の把握の三つにわかる。

論文の「国家独占資本主義の内的論理」「国家独占資本主義の法則性」は研究テーマの①、③に重点をおいている。論点はすでに Antonio Pessen（イタリアの経済学者）によって一般的に提起されているが、拙論では資本の内的矛盾の運動として段階的に展開、とくに従来展開されていない独占利潤の法則と利潤率の傾向的低落の法則との内的連関をあきらかにし、国家独占を資本主義のワク内での私的独占の矛盾の止場、新しい矛盾の拡大として展開した。この点は研究の新しい分野での問題提起である。

③はわたくしと、今井則義・井汲卓一両氏との論争点で

あり、両氏の国家Ⅱ生産関係の謬論を文献考証のうえで、批判しつつ、国家独占資本主義の機構は国有企業の生産関係を基礎とする管理・統制の機構であることを論証した。

この論点はその後、国際的に確認されている（A・ルミアンツェフ）。

「戦後日本における国家資本」の論文は③の論点の具体化、とくに戦後日本における国家独占の形態変化を研究したものである。変化の特徴は独占体と国家とのゆ着の仕方、国家独占の形態変化に現われている。

《書評》（共同研究・訳書をふくむ）

① 『先行する諸形態』 大月書店

本書は原著者がのちに『資本論』に分散配置した経済学の歴史的部分のノートである。この訳書におさめた「訳者ノート」はわたくしの歴史的研究のノートであり、そのなかでとくに土地の共同体的所有分解の弁証法、アジア的封建制の特殊性、解明のうえで若干の問題提起をしておいた。アジア的封建制の理論については、日本の史学者の一部で日本の初期封建制の研究方法論に利用されている。

② 「戦後独占資本の集積と機構」〔マルクス経済学講座・第四巻〕有斐閣

本論文は日本の戦後国家独占資本主義の実証的研究である。主要論点は、(1)日本の社会経済構成における独占資本、自由資本、小商品経済、自然経済セクターの確定。(2)「財閥解体」後における独占資本の変容と金融寡頭制支配の変化、(3)戦後の高度資本蓄積の基礎と国家独占の形態変化（アメリカ・西独との比較研究）、(4)戦後国家独占資本主義と資本の運動法則との内的連関の解明。

③ 『国家独占資本主義の研究』有斐閣（のちに、『日本国家独占資本主義論』と改題されたもの）

本書はこれまでのわたくしの研究の総括である。日本の国家独占資本主義の形成、展開をならぬく運動法則を実証的研究のなかで解明する。第1部は国家独占資本主義の機構と社会経済構成。第2部は資本の高度蓄積の基礎。第3部は国家と独占資本主義。

以上

## 手嶋正毅教授遺稿ノート

故手嶋教授の遺稿は、おおきくわけて二つのものからなっている。一つは、「国家独占資本主義の機構」の研究にかんするもの、もう一つは、「日本の石器時代における原始共同体の社会経済構成」の研究にかんするものである。しかし、のこされた歴大な量の覚書き、ノートのなかからは、完成された、あるいは作成途中の原稿のかたちのものは発見できなかった。以下に掲げるのは、比較的最近のものと思われる「国家独占資本主義の機構」と題されたファイルのなかにあった「国家規定の最終プラン」その他にかんする覚書き、および「日本の石器時代における原始共同体の社会経済構成」と題されたノートの主要な項目だけをぬきだしたものである。

(芦田文夫・島津秀典)

### ※「国家規定の最終プラン」

と題された覚書きの主要項目

#### 国家規定の最終プラン

戦後日本の国家規定

一、戦後日本の国家と経済的土台

- (1) 国家と土台
- (2) 法律

遺稿(手嶋正毅教授遺稿ノート)

二、国家形態

- (3) 国家行政機関
- (4) 政治行為(国家の役割)
- (5) 政府と議会
- (1) 政治体制
- (2) 統治形態
- (3) 国家機構形態

三、安保体制Ⅱ半占領制度

二〇一(六一七)



(1) 金融的従属（経済的不均等発展と平行）  
※「高度成長と金融引緊政策」

（単独講和の維持）  
十、軍事的従属

(2) 軍事的従属 $\parallel$ 半占領制度

四、国家的従属の諸形態

五、構造改革と民主的改革

(1) 国独資と平和移行

(2) 国有化と国家的統制の民主化

(3) 戦後国有企業の労働者管理

六、国家と独占体の癒着

津田道夫のレーニン批判・「構造改革論」

青木書店「国家と革命の理論」

一、国家発生論の「欠如」

二、国家機能の二重性

津田氏の経済的土台と上部構造

一、幻想上の一般利害

二、独占段階での国家機能の二重性

(1) 国家の社会的機能

(2) 国家の政治体制の反動化

※「高度成長と金融引緊政策」

と題された覚書きの主要項目

### 高度成長と金融引緊政策

〔序〕 昨年（昭和四四年―編集者）来、

二度にわたる金融引緊

- 1、昨年九月
- 2、今年（昭和四五年四月―編集者）

一、国際収支の悪化

二、金・ドル準備の減少に対する対策

三、高度成長にともなう景気調整は国際収支の決済において

は無力

I 高度成長の経過

〔特徴一〕 ① 第一部門主導の拡大再生産

② 軍需品激増

〔特徴二〕 1、法人企業の所有資産の増加

そのなかで資本金一〇億円以上の大企業への

資産集中が顕著

2、…（したがって、以下おなじ―編集者）高度成

長は民間大企業中心の拡大再生産

3、国・公有部門の比重……消費財で若干増。

生産手段では低下

4、家計部門……高度成長は個人的消費を相対的に低下させた

**特徴三** 資本蓄積

一、国富構造の推移は資本蓄積によって規定。生産水準、昭(和)以下おなじ、編集者)三〇年に戦前最高水準に到達。

二、三〇年以降、第一部門主導の高度成長を展開(第一部門の自立的優先的發展)。

三、民間固定資本形成の増加率が最高。その内的要因(三つあげられている―編集者)。

四、昭三七年

資本形成額の絶対的低下、成長率も急落。しかるに三八年にいたるや民間固定資本形成は再び増加。

五、三七年度以降、資本蓄積における財政依存度の高まり。高度成長における高蓄積にたいする過小消費という跛行的發展。

六、社会的総資本の拡大再生産における第一部門の自

遺稿(手嶋正毅教授遺稿ノート)

立的優先的發展。昭三七年を転期として過剰生産の段階に入った。しかし、生産者製品在庫率指数はとくに高い訳ではない。また稼働率指数も、三七、三八年の低下巾は僅か。三九年は上昇さえする。

七、可変資本の蓄積をしめす労働力の側面

高度蓄積を労働力の面から可能ならしめたのは

▲労働力の増加の要因▼

①労働者の自然増加

②農村からの労働力の供給

③婦女子の家計補充労働の増加

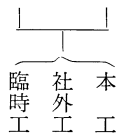
**特徴四** 現実資本と貨幣資本

以上は、「もの」と「ひと」の両面より現実資本について高度成長の構造を考察した。これを要約すれば――

高度成長―重化学工業中心の設備投資主導のも

とに進行。昭三七年以降↓設備投資によって生産

は過剰局面にはいったのに、投資水準、(在庫率)、稼働率等のいわゆる景気諸指標は必ずしも特別に悪化していない。



∴ 生産過剰の局面にはいったのに恐慌的整理がおこなわれていない。その要因をなしたのは、何か。

すなわち、設備過剰・生産過剰が過剰資本の整理・W（商品、以下おなじ―編集者）価格の全般的低落、貨幣資本の不足等の恐慌現象を全面的に誘発しないのはなぜか。

この問題を解明するには、現実資本の運動にくわえて、貨幣資本の運動を解明する必要がある。

過剰商品はいかに実現されているか。

すなわち、 $G \rightarrow W \dots P \dots W \rightarrow G$

商品資本の貨幣資本への転化が、いかに進行しているか、を明らかにしなければならぬ。

① 商品の実現の形態としての企業間信用

a 企業間信用 ≡ 商業信用

商業信用の規模 ↑  $\left\{ \begin{array}{l} \text{① W 取引額の増大} \\ \text{② 決済条件の長期化} \end{array} \right\}$  ↓ 膨脹

≡ W の最終実現の困難化

$W \rightarrow G$  への転化の期間が長期化

b 決済条件の推移

決済条件は、 $\left[ \begin{array}{l} \text{昭三七年より急激に悪化} \\ \text{大企業の悪化が著しい} \end{array} \right]$

矛盾  $\left\{ \begin{array}{l} \text{企業の損益分岐点の上昇} \\ \text{↓ 操業度の高水準維持の必要} \\ \text{企業の生産過剰の圧力} \end{array} \right\}$   
← 押し込み販売の増大 ≡ すなわち、決済条件が悪化しても企業間信用の拡大を通じて設備投資と生産を強行。

企業間信用の膨脹の結果、

① 生産過剰という現実資本の矛盾を蔽いかくすことになる。

② 企業の総資本利益率の低下

③ 企業間信用の膨脹 ↑ 大企業においては銀行信用に支えられている。

今日では、企業間信用 ≡ 商業信用。銀行信用の変形として機能。

∴ 企業間信用 ≡ 実質的滞貨融資の役割を演じる。すなわち過剰生産の一部は生産調整、のこりは売掛債権の累積という形に転形させてい

る。

現在の過剰生産局面が恐慌的整理という現象をとまなわぬ理由の一つはここにある。

**特徴五**

高度成長の資金的側面としてのオーバー・ロー

ン

(1) 三〇年の資金的側面……企業↑銀行信用↑日銀信用に依存

(2) 三五年までの高度成長過程……好況局面

(3) 不換銀行券流通下の物価騰貴

①景気変動による物価騰貴(三五年以前)

②通貨の過剰流通によって生ずるインフレーション

による物価騰貴

以上の①②の複合。

日銀貸出残高

(4) 都市銀行の日銀借入額

(昭和三六年―編集者)以後、増減はあるが、三五年以前に比し高水準を維持。

三六年には局面が好況↓過剰生産の局面への移行、

過度信用の時期に入った。

遺稿(手嶋正毅教授遺稿ノート)

すなわち、過剰生産の結果、W資本↓G(貨幣)

以下おなじし(編集者)資本への順調な転化が妨げられ、信用創造によって景気刺激策がとられたわけだが、生産過剰という現実資本の矛盾が解決しないかぎり、追加投入されたG資本は滞貨融資として機能することになる。この結果として、通貨のほう脹、過剰流通が生ずる。

(5) 一方では市中銀行信用と日銀信用は、追加G資本を供給して、企業の過剰資本の整理を食いとめて矛盾の爆発を引延す。このことは他方では未整理の矛盾を深める。

その矛盾の拡大とは、

①企業の over loan = over borrowing ↓ 金利負担

の上昇 ↓ 株価の急落 ↓ 日本共同証券の設立  
日本証券保有組合

②通貨の過剰流通 ↓ インフレを誘発

独占価格……財政金融政策による通貨供給 ↓ 市場拡大 ↓ 独占企業の独占価格の維持。

かっつての景気変動にみられなかった物価変動現

象をもたらししている。非独占と一般大衆の流通過程からの収奪。「公共料金・公定価格はその上に、財政上の独立採算制から一一般会計才出の節約から、物価上昇の上にせられる。」

③恐慌的整理

大企業……さまざまの形態の信用を利用して、貨幣資本の不足を回避。（十）労働者の解

雇  
作業場閉鎖  
合併

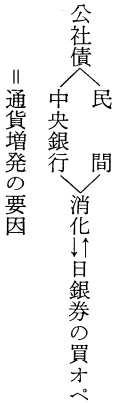
中小企業……過剰資本の恐慌的整理が中小企業にのみ跛行的に進行し、企業格差の拡大

大↓中小企業の市場の限界をますます狭くする。

〔倒産状況〕

④公社債の発行増

〔財政の Built-in-st の破綻より起る〕



特徴六

あらゆる形態の信用（商業信用・銀行信用・日銀信用・公信用）の動員の諸結果

過剰な現実資本の矛盾がG資本にしわ寄せされていることの総資本⇨国民経済的規模での表現。

特徴七

国家独占資本主義下の恐慌的特殊形態

過剰資本の価値破壊

- 1、独占資本  
 ↳各種信用動員によって旧来の価値破壊を回避▽
- 2、非独占・中小企業…  
 過剰資本の価値破壊
- 3、大衆への負担転嫁

管理通貨制度……直接、流通必要量に拘束されない不換紙幣の発行制度。しかし、信用創造の限界。

財政金融政策は所詮、流通部面と分配部面の対策。

恐慌の窮極の原因はのこる

- 1、特定産業の慢性的過剰  
 ↳生産の無制限的拡大傾向▽
- 2、大衆の窮乏化  
 ↳限られたる消費の根拠▽

※「資本集中」「株式市場」

と題された覚書きの主要項目

資 本 集 中

I 大型資本集中は、技術革新と集積とが、第三段階・第二期にはいった昭三六、とくに昭三八年より急速に進行した。

造船部門

II (1) 集中の目的

「国際競争力強化のため」II設備大型化によるコスト引下げ↓人件費の切つめ、労働者にたいする搾取強化。

(2) この部門では自由化対策ではなく、海外進出の準備。

(3) 三菱重工業は日本一の兵器会社となる

III 集中の諸結果—合理化

IV 鉄鋼部門の集中

1、八幡・富士鉄の合同↓「新日本製鉄」

遺稿（手嶋正毅教授遺稿ノート）

2、三井系三紙合併

V 独禁法と公取委。通産省。

VI 資本集中の諸結果—労働者にあたえるえいぎょう

株 式 市 場

1、供給者側の要因

(1) 増収・増益

(2) ①日本共同証券と日本証券保有組合による株式の凍結

②銀行の株式引受けによる↓株式市場での相対的不足

二、需要者側の要因

(1) 国内の大手筋の株式の買入れ殺到

(2) 外人の株式投資の急増

三、大企業の増資準備計画

※「労働の疎外」からはじまる覚書きの主要項目

I 労働の疎外

II 所有形態の分解過程

III P&G（生産手段—編集者）の私的所有と基本的経済法則

二〇七（六二三）

（資本制）

Ⅳ 国家独占の機構Ⅱ連鎖

一、独占

二、国家独占の機構

三、国家所有の担い手としての独占資本の所有と機能（管

理・運用）との分離

(1) 第一次大戦前

(2) 第一次大戦—第二次大戦

(3) 第二次大戦後

A 旧四大財閥

B 新興独占資本

四、資本所有と持株会社

戦後「財閥解体」の結果、持株会社にかわって、銀行資本が独占支配の拠り所になったとの評価が一般にあるが、これは正しくない。持株会社は資本所有Ⅱ支配の役割をもち、産業資本と融合する銀行資本の優位性は資本機能の性質にある。したがって両者は二者択一的ではなく、また後者の形態が近代化したというのではなく、両者は並存しうる性質のものである。私的独占体の持株会

社制度こそは、資本の所有と管理・運用との分離の頂点である。

持株会社復活への過渡形態としての社長会の集団協議制とその内部的不統一（例。住友系「白水会」。欧州経済使節団団長大屋普三郎帝人社長「(1)欧州では、企業集中の有力な方法として、持株会社制度をフルに活用している、(2)持株会社には財閥や異質の企業を含むもの、政府の産業投資によるもの（イタリアのIRI〔産業復興—編集者〕公社など）、民間の同種企業の結合によるもの、の三つの型がある。」戦前財閥の持株会社と戦後の持株会社との区別は、国際的競争力の付与（企業集中の手段）と外資の買占めに対する防衛策であり、「旧財閥の復活とか政府が介入したIRI公社のようなものではなく、わが国の場合は、同種企業の合併に必要な手段の一つにしたい。」戦後日本の独禁法は持株会社を全面的に禁止している。これにたいし、「経済審議会の産業分科会が合併や共同投資、合理化カルテルなどの促進のため、その運用を緩和すべきだ」という意見を打出した」。宮沢経済企画庁長官「持株会社によって、資本自由化に備える

産業体制が整備されるなら、それをばむ理由はない。

法律の運用は、実情に即して考えたい。

独占法の改定による持株会社の復活が日程に上る。社長会の集団協議制にかわる持株会社の復活にもとづく独占体の専制支配への志向。

## ※『日本の石器時代における原始共同体の

### 社会経済構成』のノートの主要項目

(一九六九・一〇・一二の日付がある。このノートは、次のような書出しに始まり、あとにかかげるような項目の構成になっている。―編集者)

「起源と発展とを知るとき、はじめて物の本質を知ることができる。」(古代ギリシャの生んだ偉大な哲学者Ⅱヘラクレイトス。アリストテレス) 『初期ギリシャ哲学者断片集』岩波書店、一九五八年。

社会科学の領域において、マルクスほどこの言葉のもつ深い意味を体得していた人はない。

遺稿(手嶋正毅教授遺稿ノート)

石器には原始人の生命いのちがかかっている。そこには簡素で美しい美しさがある。この汗と膏と美を発見できない者はわれわれの原日本人せせんを語ることはできない。(一九六九・一〇・一二)

いずれの国の祖先にも共同所有があった。日本にも、やがて原日本人の通過した太古の時代より、より高い次元で、生産手段の共同所有が実現するであろう。

日本の考古学は、研究室、学者たちの真摯な研鑽と出土地の人々の汗と膏の努力との合作によってはじめて前進してきたし、また今後も前進するであろう。

学者が考古学研究室における研究の立おくれを早急にとりもどすことなしに、地元民の労苦に報いるすべはない。

いまの浜辺の漁夫に、あの遙けき古の縄文びとのなめた飢えと寒さにうずくまる姿を思い出すとは思わなかった。

二〇九(六二五)



〔項目の構成〕

- I 日本における原人
- II 石器の発展を基礎とする時代区分
  - 一、狩猟・採取↓狩猟・採取(十)漁撈↓狩猟・採取・漁撈
    - (十)農耕(焼畑↓水稲)
  - 二、生産用具
- 三、生産用具の分類(諸用具の内的連関)
- III 社会構成
- IV 母系(父系)家族と宗教の発生
- V 土地の共同所有
- VI 原始共同体と商品交換のはじまり
- VII 土器